南山城水害六十周年水難者追悼式

～防災の誓い新たに～

八月八日㈭、南山城水害六十周年水難者追悼式が執り行われました。

昭和二十八年八月十五日未明に発生した集中豪雨により、和束町は家屋の全壊、道路の寸断、田畑の流失などで壊滅状態となり、百十一人が犠牲となりました。

今回の式は、多くのみなさんが参拝しやすいようにと今年三月に消防署前から和束B&G海洋センター前に移設された水難者慰霊碑前で行われ、遺族ら約四十人が出席されました。

式典では、堀町長が「犠牲となられた百十一人のみなさまに対し心からご冥福をお祈りするとともに、住民の方の生命と財産を守り抜くため、防災・減災に係る様々な施策を実施し、安心・安全なまちづくりを目指します。」と追悼の言葉を述べました。また、遺族代表の前田照男さんが「水害の知らない世代も多くなり、この貴重な体験と治水、治山事業の重要性を後世に語り継ぐことが、私たち遺族に課せられた責務であり、二度とこのような惨事を繰り返すことのないように、より一層努力することを誓います。」と述べられ、出席されたみなさんは、黙とうや献花をして犠牲者の冥福を祈りました。

▶遺族代表の前田照男さん

▲追悼の辞を読みあげる堀町長

ご寄附ありがとうございました

「和束町ふるさと応援寄附金基金」へ次のとおりご寄附をいただきました。（平成二十五年八月）

氏名	住所	寄附金額
匿名希望	京都府精華町	二〇、〇〇〇円

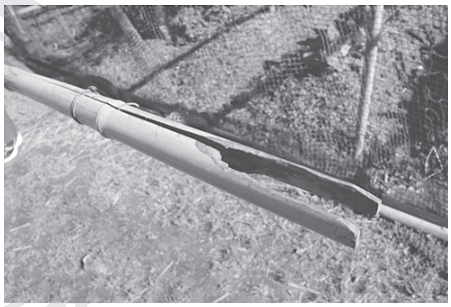
ありがとうございました。

お寄せいただいた寄附金は、和束町のまちづくりのため有効に活用させていただきます。

和束町茶業史つうしん Vol. 7

茶畑の畝間にそびえる柿の木は、和束町内の当たり前な風景です。さて、9月から10月にかけては柿渋仕込みの季節。柿渋は、漁撈用具・農具・建具などに塗ることで、強度増加や防虫の効果が得られます。

「柿の木はサクイ（和束弁で「裂けやすい」の意味）ので折れやすい」といいます。町内では、ハサンボリ・ハサンバリといわれる、竹の先を裂いてＹ字にした道具を使い、柿を収穫します。家によって、ハサンボリのＹ字構造に工夫があります。湯船のある農家さんによれば、銭司の茶畑にあった28本の柿の木は、すべて柿渋加工用だったそうです。健康志向の高まる現代において、柿渋はその効能が再評価され、外壁材・石鹸などに加工され、注目を浴びています。


柿の実を採るハサンボリ

取材者：和束町観光振興協議会茶業民族調査員

5年目を迎えた

早稲田大学・京都府・和束町協働の取り組み

～「京都講座」開講（8月18日～23日）～

江上教授・北川教授による講演会

早稲田大学大学院の学生が、フィールドワークや住民との交流を通じ、地域の実情に応じたまちづくりの提案を行う「京都講座」が、今年で5年目を迎えました。

今年も、早稲田大学大学院江上能義教授と北川正恭教授指導のもと、８人の学生が、8月18日から6日間にわたる和束町内でのフィールドワークの結果をもとに、まちづくりの施策提案を行いました。

初日は、学生が農家に泊まり込み、茶畑や休耕田での草刈りなどの農作業で汗を流しました。2日目からは、2班に分かれて聞き取り調査や現地視察を行い、和束町がめざす「ずっと暮らしたい　活力と交流の茶源郷　和束」の実現を基本テーマに議論を重ねました。

休耕田の草刈りで汗を流す学生

最終日には、湯船地区担当のＡ班から、湯船森林公園のマウンテンバイクコースの整備と活用、町内サイクリングツアーの実施、自転車愛好家を持続的に受け入れる体制づくりなど自転車による新たな誘客で和束町の活性化を図るべきとの提案が発表されました。

一方、和束茶カフェ周辺エリア担当のＢ班からは、「和束茶」ブランドの確立、農家民泊の推進、協働による和束茶カフェの活性化等により、定住人口及び交流人口の増加を目指すべきとの提案が発表されました。

期間中は並行して、両教授による講演会や、両教授と住民、町職員との意見交換会も行われ、活発な議論が交わされていました。

和束町では、今回の提案の中で実現可能なものについて取組を進め、「ずっと暮らしたい　活力と交流の茶源郷　和束」の実現に向けて、住民のみなさんとのさらなる協働を図っていきます。

まちづくり提案発表会